

(海外・国内) インターンシップ報告書

2020 年 1 月 20 日提出

氏名	今里裕平
所属	国際感染症学院 感染症学専攻 寄生虫学教室
学年	博士課程 3 年
活動先名	OIE、日本
期間 ① (出発日―帰札日) ② (インターンシップ 実施開始日―終了日)	① 2019 年 10 月 1 日-10 月 4 日、2019 年 12 月 25 日-12 月 26 日 ② 2019 年 10 月 1 日-10 月 4 日、2019 年 12 月 26 日

帰国後 2 週間以内に提出してください (厳守) A4 用紙 4 枚以内 下記項目は変更しないでください。

・活動目的及びインターンシップ先を選択した理由

私が大学院に進学した際、卒業後に思い描いていた進路の一つとして OIE や WHO などの国際機関がありました。しかし、国際機関でどのような活動をしているのか、どうやったら一員になれるのかを具体的に知らなかったため、本インターンに参加し知りたと思いました。

また、今回参加した OIE 主催のアジア太平洋家禽疾病国際会議は、各国の家禽疾病状況を報告した上で次に目標にするべきことを決めるという点で、自分の分野にも持ち込めるかと思いました。私は多包条虫という人獣共通感染症を引き起こす寄生虫についての研究を行なっています。そのため多包条虫の分子生物学的知見を保有していると自負していますが、世界の流行状況やそれを踏まえた対策などは知りません。もし対策を考える立場になったとしても、問題を構造化し適切なアドバイスをする手立てを知りません。そのような立場になるとして遠い未来のことですが、今後のことを見据えて、疾病に関して国際機関がどのように判断し、どのように決断するのかを知りたいと思い今回のインターンを選択しました。

・活動内容・成果 (2,000 字程度、活動内容が判る様な写真や図表を加えて下さい)

インターンの前半 (①～④) では Regional Expert Group Meeting for the Diseases of Poultry in Asia and the Pacific Region に参加し、会議の運営補助業務を行った。後半 (⑤) では OIE 東京事務局を訪問し、実際に行っている業務の説明を受けた。成果としては、OIE の具体的な活動の一つである regional group meeting での議論の組み立て方を学べたこと、国際機関へ参加するための方法を知れたことが挙げられる。

① 2019 年 10 月 1 日

実習概要

- ・ OIE の概要説明、会場の設営、配布資料の準備

特記事項

- ・OIEの業務内容と規模を知りました。アジアを代表する東京事務局は10名程、全体でも百何十名の小規模な組織だということを知らず驚きました。
- ・国際会議初日は専門家が集まるので、より専門的（診断技術、鳥インフルエンザの株の種類、研究成果など）な内容になる予定です。

② 2019年10月2日

実習概要

- ・朝は到着した参加者の受付係を請け負いました。また、日中はインターン生で手分けし、パソコンの操作、撮影、ベル係（時間管理）を担当しました。
- ・会議の中で、高病原性鳥インフルエンザ蔓延の原因は、鴨の潜伏感染(silent infection)があげられました。



特記事項

- ・鴨の制御が重要であることは参加者の中でも一致しておりましたが、制御方法としての摘発淘汰(stamping out)は現実でないという声が多くあがり、より摘発淘汰に限定しない表現を方針が用いることが求められていました。しかし、鶏牧場では鳥インフルエンザが検出されないものの、マーケットで鴨と一緒に飼育、販売することで検出率が上がることから、鴨の診断と制御は急務です。

摘発淘汰で成功した例としては韓国があり、その例を韓国代表が説明されていましたが、韓国の鴨飼育数はその他の東南アジア諸国よりも少ない現状があります。

また、一部のアジア諸国は正確な診断が実施できておらず、そもそもの流行状況を捉えられていませんでした。

- ・2日目は本日の情報と議論を踏まえて、詳細な対策を policy maker と議論します。

③ 2019年10月3日

実習概要

- ・到着した参加者の受付係を請け負いました。また前日同様、インターン生で手分けし、パソコンの操作、撮影、ベル係、マイク係を担当しました。私はパソコン周りの業務を担当していたため、国際会議2日目の発表資料を参加者から集めました。



- ・前日同様、各国の状況を報告し、それを踏まえて本会の方針を議論しました。最終的に時間が押してしまったため、最後の議論はあまり活発に行われず、最終日に持ち越すことになりました。

特記事項

- ・発表内容の多くは前日と類似していました。
- ・多くの国は農家との連携ができていない（農家は病気の実態を隠す）ため、農家や企業との連携が必須であることが指摘されていました。東南アジアでは小規模な農家や運搬役、肉屋などが絡み合っ商売が実施されており、その実態解明は非常に困難な印象を受けました。その中でも、ベトナムの食肉を運搬する個人に GPS をつけ、行動をトラッキングした報告では今まで見えて来なかった家禽疾病のリスクが顕在化し、非常に有意義だと感じました。
- ・OIE は色々なセクターに別れていますが、それぞれの連携は特になされていませんでした。横のつながり、特に隣国との連携は疾病制御の観点で必要だと感じました。
- ・多くの国で最も問題になっている家禽疾病は鳥インフルエンザですが、その他（ニューカッスル病など）も十分に問題です。その他の家禽疾病は各国での連携システムがないため、鳥インフルエンザ対策よりも遅れているとのことでした。

④ 2019 年 10 月 4 日

実習概要

・グループを 4 つ形成し、それぞれのグループにインターン生が二人ずつ入りました。インターン生はグループに与えられたテーマについてまとめ、最後にインターン生が発表しました。テーマは鳥インフルエンザ、その他家禽疾病、ネットワーキング、capacity の 4 つでした。

・議論した内容を踏まえ、本会議の推薦事項 (recommendation) が作成された、全参加者で共有されました。その後、まとめられたものが OIE のホームページに掲載されていました。

特記事項

・各班の議論した recommendation の出し方は北大の大学院で行われている議論と類似した方法でした。Recommendation は具体的な指摘もありましたが、努力目標のような内容が特定されていないものも多くありました。

・議論は行われていたものの、一部の国の発言権が強く（各人の個性の違い）、各国の意見が満遍なく反映されているかは疑問に残りました。

・OIE reference laboratory も提案をしていたが、その提案とその他 recommendation のどちらが優先されるかはよくわからなかった。



⑤ 2019年12月26日

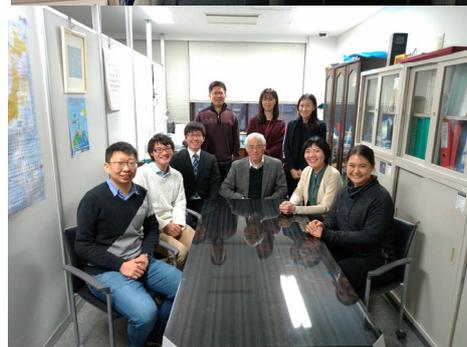
実習概要

・小会議室に案内され、講習を受けました。講習は5人のOIEメンバーが実施してくださいました。内容はOIEの活動全般、OIEの実施している教育プログラム、水産動物の管理についてなどでした。香港から来られていたメンバーもあり、野生牛の管理等公務員獣医師の業務についてもお話していただきました



特記事項

国際会議では家禽疾病という専門的な題材を扱いましたが、OIEは他の疾病を扱う以上に教育や国との協業、ルールの作成や翻訳作業にも力を入れており、その活動が多岐にわたることを知ることができました。



・今後のキャリアパスを考える上でどのようにプラスになったか。

今後のキャリアパスを考える上で、国際機関で勤務したい場合、どこかの公共機関から出向することができるということが知れたのはプラスでした。直接OIEのような国際機関に所属することができなくとも、国の期間で類似した業務を行なっている場合、協業し、転職も考えられます。また、OIEに所属していなくても、OIEのレファレンスラボラトリーとして国際業務に参画できることも知りました。このように多様な形で国際機関に関わり、将来的には所属する知見を得ました。

・後輩へのアドバイス

興味のあるインターンシップや活動は早いうちに行くことで視野が広がったり、本当にやりたいことなのかを考え直したりすることができます。興味があるならば、大学院3年次以降の単位の一環でインターンに行く以外にも、留学資金や奨学金を駆使してインターンに行くことをお勧めします。

指導教員確認欄	指導教員所属・職・氏名 寄生虫学教室・教授・野中成晃
---------	-------------------------------

- ※1 電子媒体を国際連携推進室・リーディング大学院担当に提出して下さい。
- ※2 インターンシップ先の担当者が活動内容を証明した文書（署名入り）を提出して下さい。
- ※3 本報告書はリーディングプログラムキャリアパス支援委員会で内容を確認します。その後、教務委員会で単位認定を受けることになります。

提出先：VETLOG

内線：9545 e-mail: leading@vetmed.hokudai.ac.jp